



泉水と早鐘
湖北町河毛の松島さん宅では「庭の泉水の石が水で隠れると、早鐘が鳴る」と伝えられていました。松島さんが子供の頃、実際に石が水で隠れると半鐘が鳴らされ、男子全員が川の警戒に出て行ったそうです。

充滿寺の梵鐘 (高月町西野)
「文化4年(1807年)5月23日、早朝より大雨が降り始め、同夜には洪水となり、堤防が12間半(約22m)が切れた。西野の村中に洪水の水が入り込み、海のようになった。村人たちは驚き恐れ、寺の鐘を早く何度も撞いて村中に異常事態を知らせた」(野洲家年代記から)とあるように、住民への通信手段の一つとして、昭和10年ごろまでは梵鐘が使われました。半鐘(喚鐘)なども使われましたが、梵鐘の方がより遠くへ伝わるものと思われます。



洪水の様子を伝える郵便書簡
大正10年(1921年)9月、片山雅洲が友人に送った郵便書簡。高月町雨森の洪水の様子を絵と文章で伝えています。
片山雅洲(1872-1942)
日本画家。京都・東京で修行した後、郷里(高月町物部)で生涯作品を描き続けました。



水点標 (湖北町丁野)
碑には「明治28年7月29日大洪水」とあり、その時の水位が記されています。



ここまで進んだハイテク防災システム! 一人一人の防災意識が情報を生かす

異常気象が世界各地で頻発、わが国でも予想外の集中豪雨の被害が増えています。湖北では幸いここ数十年、浸水の被害こそ起きていませんが、予想を超える集中豪雨が突然発生する可能性があるのは同じです。どうすればその被害から命と暮らしを守れるのでしょうか。彦根地方気象台の専門家、各町の防災担当者、そして伊勢湾台風を体験されびわ町にお住まいの森川さんにお話をお聞きしました。

整備されつつある ハイテク観測網

洪水につながる大雨は「ある程度の予測」が可能になっています。昔に比べて天気予報の精度が飛躍的に高まっているからです。現在の予報の精度は何と約80%。30分間隔で気象レーダーによるデータを全国に張り巡らされたアメダスの観測網データで補正、2.5km四方単位で雨の状況が分かるようになっています。将来は1km四方単位で解析できるようにする予定です。

気象台では、大雨による洪水や土砂災害などの重大な災害が発生する気象状態になると予想された場合に、「大雨警報」や「洪水警報」を発表して警戒を呼びかけています。さらに、指定された河川では河川管理者と気象台とが共同で降水予測を基にした水位予測により「洪水予報」も発表しています。また、平成11年の広島での広域土砂災害の教訓から「土砂災害警戒情報」が近年中に発表されるようになる予定です。

しかし、平成16年9月5日、和歌山県を中心とした地震では、津波警報が発令されたにもかかわらず、避難した人は少数でした。たまたま津波の規模が小さかったから事なきを得たものの、もしインドネシア・スマトラ沖地震並みの規模の津波が押し寄せていたら大変なことになっていたはずで、洪水も同じこと。治水対策に加えて、被害が予想される事態になったらすみやかに避難することも、有効な「命を守る方法」だと言えます。

防災情報を生かすのは 住民の防災意識

高時川はいくつかの町を流れて琵琶湖に注ぎます。流域の住民は流域全体と近隣地域の情報を知って行動することが大切です。

現在、各市町村は気象や防災の情報を細かく把握できる滋賀県土木防災情報システム「シスパッド」(*)や、各振興局から出される情報をもとに判断して地域住民に情報を提供しています。

例えば、虎姫町では暴風雨や大雨洪水の注意報が発令されると総務と建設部門の一部職員が、警報になると全員が出勤して警戒に当たります。行政と地域の消防団が「まめに現地をパトロール、避難が必要になれば、有線放送や防災行政無線、広報車などで音に告知されることになっていますので、それに従って即座に避難することが肝心です。

しかし、「昭和50年の台風6号以来、消防団が出勤して堤防を守った」といったことがなく、洪水に対する危機感がほとんどないのが実情です。よその災害のニュースを見ても他人事。昭和34年の伊勢湾台風による近年にない大洪水のときは、高時川・姉川の合流点直下流にある難波橋で、橋桁を洗い今にも堤防から水があふれて破壊する危機にさらされ、かたずをのみながら見

守る中、地域住民が総出で防いだ実績があるのですが、「(森川忠雄さん)滋賀県ではいくつかの河川を洪水予報河川に指定されています。高時川も平成18年には指定される見込みで、指定されれば彦根地方気象台と滋賀県の両者が共同で洪水予報を発表、地元住民の方々へお知らせします。地域住民の一人一人が、それぞれの役割分担に従って行動することによって、洪水などの被害を最小限に食い止めることができるようになるのではないのでしょうか。

台風十前線に要注意

素人でも「避難指示が出るほどの雨になりそうかどうか」をある程度予想する目安はあると、彦根地方気象台・小川安清さんは言います。「台風は中心付近と周辺に強い雨雲があり大雨が降りますが、加えて日本に接近したときに日本海や湖北に前線がかかっているかどうかですね。台風によって、南の水蒸気を大量に含んだ温かな空気が前線へ流れ込み(これを「前線が台風に刺激される」と表現します)、前線付近や南側に大量の雨が降る場合があるからです。

また、台風が西側を通り、南風の強いときは雨量が増える可能性が大きい。それと、夏場の台風は大型でなくても秋台風より進行速度が遅く、強い雨が長く続くことがあるので要注意ですね。昔では考えられなかったほど整備されたハイテク観測網と、必要な情報を住民に届けるさまざまな機器やシステム。しかし、情報を受けた住民がそれを生かさなければ、せっかくのシステムもないのと同じこと。

一人一人の「自分の身は自分で守る」という高い防災意識こそが、最後の砦だといっていでしょう。

【お話を伺った方々】



森川 忠雄さん(左) 昭和3年びわ町生まれ。元長浜土木事務所長、元びわ町助役。
小川 安清さん(左) 彦根地方気象台技術課長。
北谷 実さん(左) 彦根地方気象台防災課課長。
高橋 和雄さん(左) 虎姫町総務課長。
吉田 徳夫さん(中央) 高月町地域整備課長。
松井 直矢さん(右) 高月町地域整備課長。
澤村 和良さん(左) 湖北町地域整備課長。
西村 庄司さん(右) びわ町地域整備課長。

*1 シスパッドの一部の情報として
水防雨量実況図 <http://www.shiga-bousai.jp/internet/uryo/index.htm>
水位情報実況図 <http://www.shiga-bousai.jp/internet/sui/index.htm> などがあります。
シスパッド [SISPADD] Shiga Information System for Protection Against Disasters